

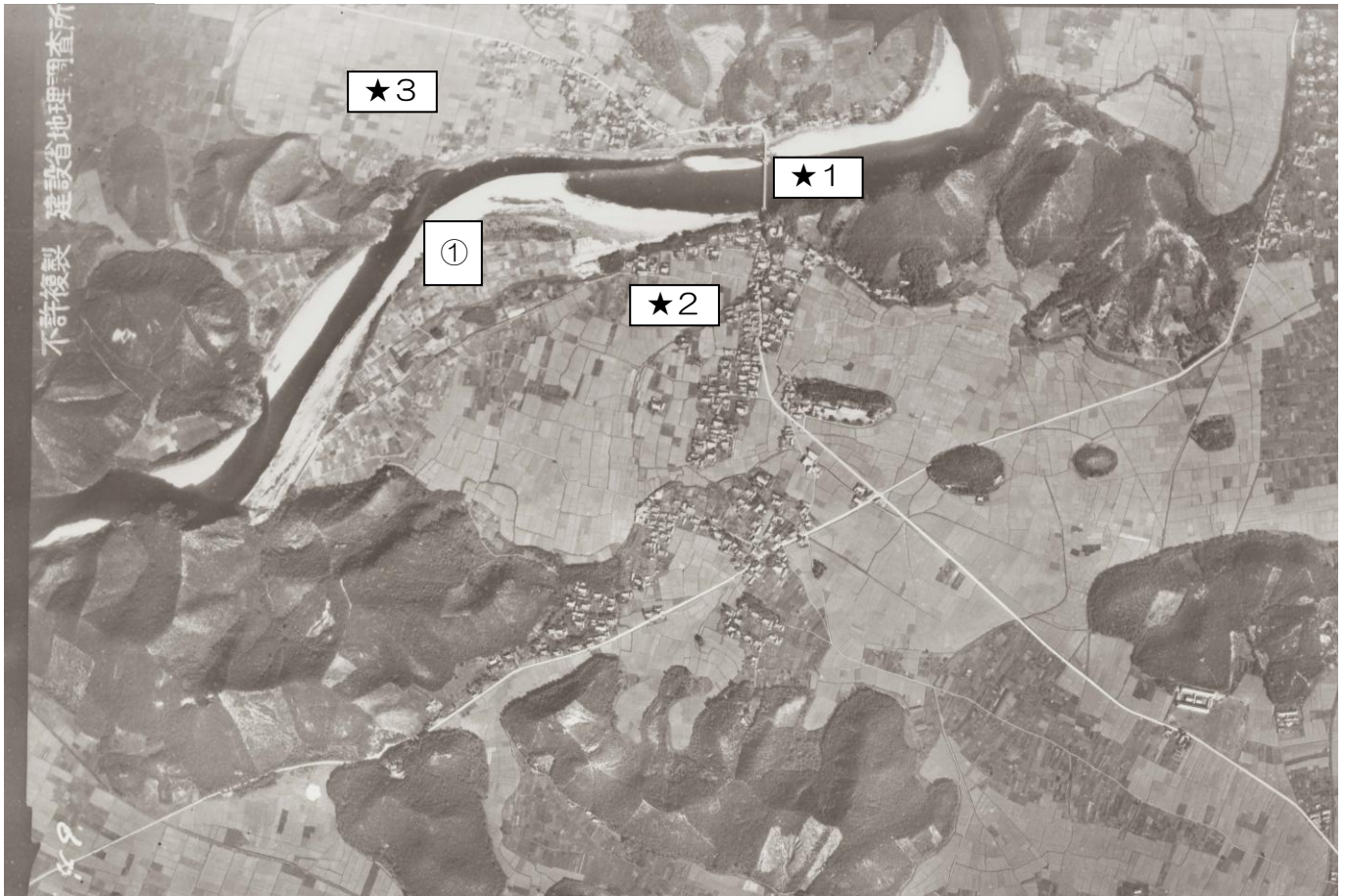
授業で使える当館所蔵地図

No. 96 『米軍撮影空中写真』

作成年：1949（昭和24）年

サイズ：46×46cm

発行：建設省地理調査所(現国土地理院)



【解説】

1949(昭和24)年に米軍によって撮影・作成されたもので、各地の自然環境や集落立地等を把握するのに適している。この写真から、現在の関市より植生が少ないことや、人家などが少ないことが分かる。また、現代の空中写真と比較することにより、土地利用の変化や地域の開発の様子なども捉えることができる。

※現代の空中写真については、「地図・空中写真閲覧サービス(<https://service.gsi.go.jp/map-photos/>)」を参照

★1 鮎之瀬橋

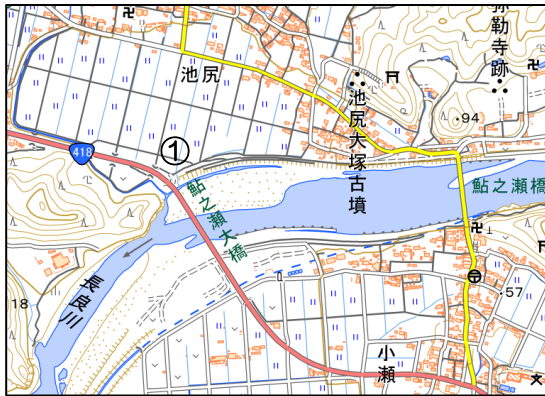
長良川左岸の小瀬地区と右岸の池尻地区(どちらも旧瀬尻村)を結ぶ橋。1926(大正15)年に完成した。兩岸ともに、道沿いに人家が見られることから、当時は主要な橋であったことが推察される。また、橋の下流部は長良川の氾濫原で、人家が少なく田畑に利用されていることが見てとれる。写真は現在の鮎之瀬橋から下流を見た様子。(2025年11月23日、筆者撮影)



★2 自然堤防上の家屋

この付近では、河川沿いに列状に家屋が並んでいる。植生などと合わせて、これは自然堤防上に設けられた集落だと読み取ることができる。

★3 関市池尻地区



長良川右岸の氾濫原で、度々洪水による被害を受けてきた。2004(平成 16)年の台風 23 号では、81 戸が床上浸水、21 戸が床下浸水となる被害が発生した。現在は、この地区に長良川の遊水池を建設する計画がある。写真は、国道 418 号線の鮎之瀬大橋(資料中①の位置)より池尻地区を眺めた様子。矢印の位置で霞堤が設けられ、堤防が切れているのが分かる。この様子は地形図からも読み取ることができる(地形図①の位置)。(2025 年 11 月 23 日、筆者撮影)

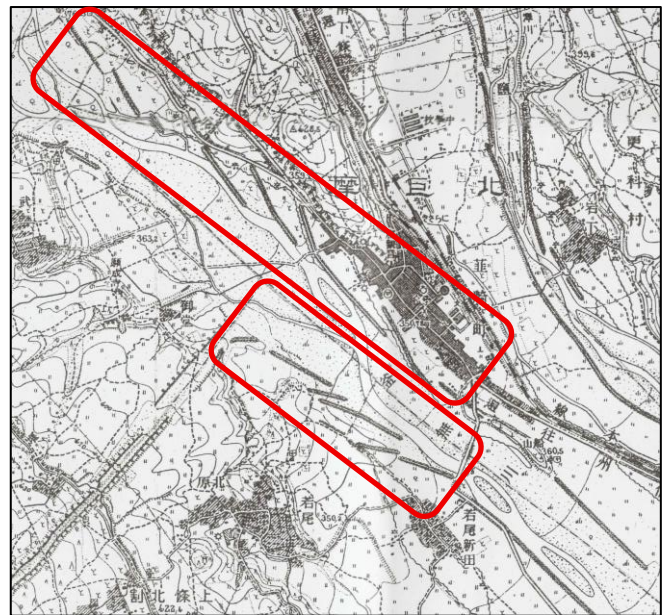
【用語について】

・霞堤

堤防のある区間に開口部を設け、その下流側の堤防を堤内地側に延長させて、開口部の上流の堤防と二重になるようにした不連続な堤防のこと。戦国時代から用いられており、堤防が折れ重なる様子が、霞がたなびくように見えるようすから、こう呼ばれている。霞堤には、平常時に堤内地からの排水が簡単に行え、また上流で堤内地に氾濫した水を、霞堤の開口部からすみやかに川に戻し、被害の拡大を防ぐことができる。右の地形図で示したのは、山梨県に残る霞堤で、武田信玄によって整備されたことから「信玄堤」の名がある(赤枠内が霞堤)。

・遊水池

洪水を一時的に貯めて、洪水の最大流量(ピーク流量)を減少させるために設けた区域のこと。河道と遊水池の間に特別な施設を設けない自然遊水の場合と、河道に沿って調節池を設け、河道と調節池の間に設けた越流堤から一定規模以上の洪水を調節池に流し込む場合がある。



【2万5千分の1地形図「葦崎」1943年】

右の地形図で示したのは、山梨県に残る霞堤で、武田信玄によって整備されたことから「信玄堤」の名がある(赤枠内が霞堤)。

【参考文献】

岐阜県(2013)『私たちが守り伝える先陣の知恵』

岐阜県ホームページ「台風第 23 号(平成 16 年 10 月 20 日)」<https://www.pref.gifu.lg.jp/page/6940.html>

岐阜県ホームページ「過去の主な浸水実績」<https://www.pref.gifu.lg.jp/page/17662.html>

国土交通省中部地方整備局ホームページ「長良川の戦後最大洪水 ～平成 16 年 10 月。台風 23 号～」

https://www.cbr.mlit.go.jp/kisojyo/gousaigai_40th/data/pdf/relay-panel05.pdf

国土交通省ホームページ「河川に関する用語」https://www.mlit.go.jp/river/pamphlet_iirei/kasen/iiten/yougo/

【利用の例】

○ 当該地域における長良川の水害の歴史とその対策の様子を知ることができる。

⇒地理総合の大項目C「(1)自然環境と防災」において河川災害を取り上げる際に、その事例として取り上げることができる。

⇒地理総合の大項目C「(2)生活圏の調査と地域の展望」において、地域における自然環境との共生や災害への備えについて考える際に活用することができる。

⇒地理探究の大項目A「(1)自然環境」において、河川が作り出す地形を取り上げる際に、その事例として取り上げることができる。

⇒地理探究の大項目C「(1)持続可能な国土像の探究」において、自然環境との共生や身のまわりの防災・減災について考える際に活用することができる。